スポーツ教材
活用事例 Case15
【タグラグビーセット】

いわて高機能広汎性発達障害の人を支援する会
（岩手県盛岡市）

特性にあわせた支援で成功体験を重ね人との関わりと運動の喜びを知る

ナチュラルなサポートを「マンガ形式」で表現 個別の支援方法の共有化を図る

高機能広汎性発達障害児を対象に休日活動の充実に努める任意団体「いわて高機能広汎性発達障害の人を支援する会（エブリの会）」では、個人の特性にあわせたポジションを与えてプレーでき、成功体験を積み重ねられるとタグラグビーに注目し、活動の主軸に据えて取り組んでいます。今回「エブリの会」の姉妹グループのひとつ「ABフレンズ」でタグラグビーを行うと聞いてお邪魔しました。

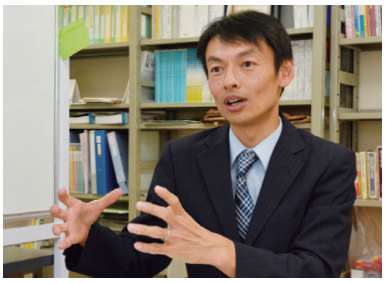
Philosophy 高機能広汎性発達障害のある子どもたちが安心して自分らしく思い切り楽しめる場の提供

「学校では笑わないという子が、ここでは積極的に用具の準備を手伝い、よく走り、仲間と協調してトライを決めると、笑顔でその喜びを分かちあうんです」と話すのは、「エブリの会」の代表を務める佐々木全（ぜん）さん。盛岡市を拠点とする「エブリの会」は、その前身が1998年にスタート。高機能広汎性発達障害のある児童・生徒の支援やその保護者の自助を目的に社会の変化や参加者の要望に柔軟に応じて、支援の内容や形態を変化させつつ17年に亘ってよりよい支援モデルを追求し続けています。高機能広汎性発達障害とは、知的障害を伴わない発達障害のひとつであり、近年、自閉症スペクトラム障害とも呼ばれています。「相手の心情や意図をうまく読めない」という症状が特徴的で、人との関わりが苦手と言われています。こうした発達障害が疑われる子どもの割合は公立の小中学校の通常学級に約6.5%在籍しているとの報告もあります（平成24年度文部科学省調べ）。

「学校教育の場では、発達障害のある児童・生徒への支援がすすんでいるのですが、放課後や休日活動においては、まだ不十分。子どもたちが自分らしく過ごせて思い切り楽しめる居場所を作りたい、できるかぎりの上質な時間を少しずつ積み重ねることで生活の質向上に結びつけようと『エブリの会』や近隣の姉妹グループの活動を行っています」（佐々木さん）

Plan 運動量もあり安全で理解しやすいタグラグビーに注目

「エブリの会」では、工作や鬼遊び、風船バレーに演劇など、さまざまな活動に取り組んできました。鬼遊びを発展させてもっと身体を動かせるスリリングなスポーツはないかと検討していた折にたまたま目にしたのがタグラグビーでした。さっそくDVDを観てみると、接触プレーがない安心感、攻撃プレーではボールを抱えて走るという容易さ、守備プレーでは相手のタグを取るという目的の明確さがある上に、豊富な運動量が確保できること、そして個人の特性にあわせたプレーが可能なことから、2007年から段階的にタグラグビーを導入。今では『エブリの会』の活動の中心となり、姉妹グループでもタグラグビーを取り入れる機会が増えています。より多くの機会にタグを取り入れて行きたいと検討していた矢先に出会ったのが当財団の教材提供でした。



大学時代の恩師の影響を受け学生の頃から高機能広汎性発達障害の子どもの支援を行っている佐々木さん。特別支援学校や高校の教諭を経てこの春から母校・岩手大学の教職大学院設置準備室に准教授として着任

「エブリの会」の活動をまとめた論文の数々。タグラグビーを取り入れた活動紹介のなかには、支援の内容とその方法を伝達・共有・活用する手段のひとつとして「マンガ形式」を検討する考察も。マンガは佐々木さんの力作。「ひょいっ」「ぽわーん」などの擬音が理解促進に効果的

定期的に会報も発行。活動内容や子どもたちの様子を伝えたり保護者間の連携を深める一助になっている

Do　熱中して取り組めるためのナチュラルサポート

佐々木さんがタグラグビーを実施する時は、「熱中してタグラグビーに取り組んでもらう」ことを主目的に、パス練習よりもゲームに多くの時間をあてています。その際「攻守それぞれにおいて目的を持ってプレーすること。そして自分の能力を存分に発揮し、同時にチームとして連携してプレーすること。トライが成功してもしなくてもそのプロセスと結果をチームメイトと共に分かちあうこと」を目指しています。

これらを可能にするのが、日頃から子どもたちの行動や心理状態をじっくり観察し、性格や特性を理解しているが故の具体的な個別の支援方法です。ボールを投げるのが苦手な子はそのまま走ってトライするポジションに、ボールを受けるのが苦手な子には手渡しでパスし、視野が広い子どもには後方の守備位置を任せ、自分の動きにひたむきな子には相手方のタグを追いかける前方の守備位置を任せるなどがその一例。しかも「支援されていると気づかれるようではまだまだ」（佐々木さん）と、子どもが苦手意識を抱かないよう、あくまでもタグラグビーとしての自然さと必然さを伴う「ナチュラルサポート」を心がけているのです。

Check　成功体験が向上心を刺激。支えるスタッフ育成が鍵

「思い描いた通りにプレーできたり、チームの連携が決まってトライできると、もっと上手になって活躍したい！という気持ちが自ずと沸き上がってきます。上手になるにはどんな所に気をつけてプレーすべきかを考え、成功に結びつく体験が技術向上への道筋になっているんです」と佐々木さん。こうした戦略的ゲームが楽しめるのも、トライしやすい場所でパスを出したり、味方からのロングパスを受けやすいよう壁となって敵のマークを遮ったり、タグを取られてもその直後にリスタートのパスを促し「ナイスパス！」と声をかけたりするスタッフが存在してのことです。

学生や社会人のボランティアで構成されるスタッフは、競技が得意な人や子どもたちと接することに長けている人とさまざま。相互に高めあってよりよい支援方法を探っているなかで、これまでに蓄積された個別の支援方法や個別戦略などを伝達・共有・活用する有効的な表現方法として考えているのが「マンガ形式」。視覚的に分かりやすく、動作の流れも理解しやすいことから、スタッフ間の情報共有化ツールとしてだけでなく、子どもたちに指導する際にも活用したいと思案中です。

Action　大人になっても楽しめるタグラグビー

ここでならみんなとうまく関わって行ける、自分らしさ全開で心地よくいられる……。「エブリの会」のような居場所を求める人がいる限り、これからも支援活動を続けて行くと佐々木さん。以前は小学生や中学生が対象の活動でしたが、その子たちが成長し高校生や社会人になっても参加を望む声があることから、最近ではタグラグビーを楽しみたい人なら年齢を問わずに参加可能な活動も開始。

「タグラグビーはラグビーの入門競技のような位置づけですが、いくつになっても楽しめます。活動を続けることで、私たちが行っているサポート的なポジションを子どもたち自身で担える自立したチームもでき始めています。これまでの取り組みが実を結びつつありますね」と佐々木さんは目を細めていました。

感情表現や人との関わりが苦手と言われる子どもたちが、仲間と共に活き活きした表情でタグを楽しむ姿に、誰もが自分の特性にあったポジションで活躍し達成感と自信を得られる競技として、タグラグビーの可能性を改めて実感しました。

「赤いカラーコーンを目指して走ろう」など、具体的に言葉と視覚で指示。プレーに迷いを生じさせない工夫のひとつ

「色々な活動のなかでもタグは身体を思い切り使ってストレス発散できます。自分が得意な役割を与えられゲームを成り立たせることで、自信をつける機会にもなっています。タグの日はさっぱりした顔つきで帰ってきます」と話す保護者の方も

試合に出ていない時にも、プレーへの関心をもち、友だちの姿に目が向くよう、得点係やタイムキーパーを子どもたち自身に行わせる

活動の始めと終わりには円陣を組んで掛け声をかけ、プレーが成功したらハイタッチして喜びを分かち合う。常にコミュニケーションが取れる場づくりを意識

盛岡市の南に位置する紫波町の子育て支援センターが運営母体となり活動している「ABフレンズ」。活動の前後にスタッフ間のミーティングを設け子どもたちの様子をもとに課題や問題を共有、支援方法などを話しあう

（2015年9月取材）